

プレジデント 一九七七年六月号

実務派形成の三段階

「鄧小平の影」に脅える華国鋒

東京外国語大学教授

中嶋嶺雄

中国社会の表層を吹きすさぶ「政治の嵐」にもかかわらず、中国の経済と社会をいわば毛沢東思想への巧妙な「面従腹背」によつて支えてきた「実務派」とは何か。文化大革命とは一体何だったのか。なぜ華国鋒は「鄧小平の影」に脅えなければならないのか……

何事もなかった天安門事件一周年

中国は4月5日の天安門事件（昨年清明節翌日の天安門前広場における大衆反乱）以後一周年を迎えた。われわれ中国研究者はこの一周年に大いに注目してきたが、何事もなく経過した。

まず第一に、天安門広場に花を掲げ故人を偲ぶという、清明節恒例の行事すら行われなかった。これは、この天安門事件一周年に対して党中央が属的に神経を使い、十分な規制をしていたことを意味すると思われる。いうまでもなく今回の清明節は毛沢東死後初めての清明節である。したがって、本来なら昨年周恩来死後初めての清明節に民衆が手に手に花をかざして周恩来を追慕したように、それを上回る毛沢東追悼の動きが当然あつてしなくてはべきである。結局それすらも党中央指導部が差し止めてしまったということであろう。地下の毛沢東はこれをどう見ているのであろうか。

第二に、昨年の天安門事件で失脚した鄧小平は、復活しそつてなかなか復活しない。この天安門事件一周年にも、結局、復活しなかった。これは、現在のところ党中

央において、鄧小平問題の決着がついていないことを意味する。

華国鋒体制になつて一度も政治局会議も、中央委員会も開かれていない。まして党大会は開催されていない。これは、華国鋒体制が制度的にも組織的にも認知されていないことを意味する。何事もなかった天安門事件一周年は、華国鋒体制のジレンマを象徴していたといえる。

しかも少し遡れば毛沢東死後、「四人組失脚」という大きな政変があつた。そして、皮肉にも毛沢東思想の正當な後継者として走資派を糾弾していた上海グループ（江青、張春橋、姚文元の四人組）が逆に反革命分子、「極左」、あるいは「極右」として戯画化されている。

日常的リアリティーの持続

しかし、こうした政治的激変、依然として続く政治中枢の不透明な状況にもかかわらず、中国社会がそれによつて崩壊したわけではなく、日常的な経済活動、組織活動、あるいは対外活動のリアリティーは持続されている。これは中国社会を支える広範ないわゆる「実務派」の存在を暗示している。過去を顧みても、文化大革命の10年



なかじま みねお 昭和11年長野県生まれ、東京外国語大学中国語科卒。東京大学大学院国際関係論課程修了、現代中国学専攻。わが国できわめて早くから文化大革命の挫折を指摘した数少ない中国研究家の一人である。著書「現代中国論」「中国像の検証」等。



文化大革命期の街角（中嶋氏撮影）

間にもかわらず、そしてその後も「政治の嵐」が中国社会の表層を吹き荒んでいたにもかかわらず、結局、この日常的なリアリティーは持続しつづけた。つまり結局この「政治の嵐」は中国社会の組織なり、制度なりを根底から突き崩すことはできなかったといえる。これは、政治的スローガンとは乖離したところで、政治に対して「面従腹背」の態度をとりながら中国社会を支えている。下級末端は人民公社の生産隊から上級は党中央にいたるまでの広範な実務派幹部たちの存在を抜きにしては考えられない。

このいわば生産重点主義というか、人間社会の不可欠で当然の要求を満たしていくことを第一とする方向——周恩来なき周恩来路線、あるいは、鄧小平なき鄧小平路線といってもよいだろう。具体的には、周恩来が残した「四つの現代化」といわれる路線が、それである——そしてそれを支える広範な実務派幹部、ここにこそそれわれが中国社会を見る場合の一つの着目点がある。

今回はその「実務派」について、少し具体的に述べてみたい。まず「実務派」という言葉は、よく知られているように、中国自身が公式にその名称を用いているわけではない。われわれ外部の人間が、さきほどの周恩來の「四つの現代化」に象徴されるような路線を支える人びとを指して、「実務派」と総称しているにすぎない。したがって、「リアリスト・グループ」と呼ぶこともできるし、あるいは、「穩健派」と呼ぶこともできるであろう。

この「実務派」という言葉が使われるようになったのは、われわれが文化大革命によって中国共産党内に党内闘争が歴然と存在することを、確認してからである。つまり、それ以前の日本の中国認識、あるいは、世界の中国認識の大部分は中国共産党は一枚岩の団結を誇り、党内に大きな対立はあり得ない、という神話にとらわれて

いた。この時期には「実務派」という言葉は生れようもなかったのである。

実務派・実権派・走資派

すでに述べたように、中国では「実務派」という言葉はないが、最近では「走資派」（ゾーツーパイ）という言葉があるし、かつてから「実権派」（タンチンヨンパイ）、「当権派」ともいう——という言葉があった。

定義は必ずしも簡単ではないが、「実権派」、「当権派」は読んで字の如く、「権力のなかに身を置いている人びと」という意味であり、それは一方で幹部連の官僚主義を批判する言葉であり、また他方で大衆の要求を上から抑圧する特権階級を批判する言葉であった。さらに具体的に言えば文化大革命において、毛沢東は党内少数派であったが故に、一方で多数派に対して「造反有理」——反抗には道理がある——というスローガンを掲げ、他方で彼らを攻撃するために「実権派」という言葉を用いた。

「走資派」は、「資本主義の道を歩む「実権派」の略称である。つまり、「実権派」のなかでもっとも悪質な人びと」に対する代名詞である。鄧小平は、その代表的人物として批判され失脚した。

さらにこの言葉をたち入って説明するために英語の表現を借りてみたい。まず「走資派」という言葉は、英語では「キャピタリスト・ローターズ」（資本主義の道を歩む人びと）という言葉で比較的簡単に表現できる。これに対して「実権派」は英語で表現する場合、適当な言葉がなかなかない。ビュロクラットといっただけではもちろん不十分である。ある意味での特権者という意味をそこにかぶせなければならぬ。いままでいろいろな翻訳がこころみられたが、やがて中国当局も、あるいは、諸外国でも「パーソンズ・イン・オーソリティー」（権威ある



周恩来(しゅうおんらい)



鄧小平(とうしょうへい)



劉少奇(りゅうしょうき)



彭德懷(ほうとくかい)

共同通信社

いは、権力のなかに身を置いてある人びとという言葉を使
うようになった。さらに「パーソンズ・イン・オーソリ
ティー」のあとに「キャピタリスト・ローターズ」とい
う形容句をつけ加えると、「実権派」というものの性格を
だいたいの正確に表現できる。つまり「走資派」という言
葉は「実権派」から派生したものだ。が翻訳する場合には
逆に「実権派」という言葉を「走資派」という言葉で補
って翻訳するわけである。

そしてそれを「実務派」と我々が呼ぶのは、「実権派」
といういわば強い非難を含んだ言葉から、非難の意味を
取り去り、さらにむしろ彼らのほうに政策妥当性がある
という積極的な価値判断を加えることである。したがっ
て中国当局はおそらくこれをよしとしないはずである。

たとえば、わが国の日中友好協会正統本部の機関誌は
名譽にも「実務派」という誤った言葉を最初に使った」
という理由で私を批判していた。

私が最初に使ったかどうかはともかくとして、これは
おそらく実務派という総称自体を中国当局がよしとしな
いということの意味を意味していると思う。

毛沢東批判の非連続な総体

言葉の問題はこれくらいにして、次に実務派を革命以
後の中国の歴史と社会の中に私なりに位置づけてみたい
と思う。

私はかつて「実務派」について「毛沢東路線に対する
批判と抵抗の非連続な総体である」という少し長いめん
どうな定義をしたことがある。「非連続の総体」という意
味は次のようなことである。

中国社会は常に人間関係では「面従腹背」的な構造
あるいは「顕教」と「密教」的構造がある。したがって
実務派も毛沢東思想に対する批判という点では共通して

いながら、お互いに組織的に明確な繋がりをもっている
わけではないし、明確な建前上の一致があるわけではな
い。いわば暗黙の了解のうちに「密教」的合意を持って
いる毛沢東思想への批判グループ、あるいは、毛沢東へ
の拒否権集団である。周知のように文化革命においては、
毛沢東、林彪は劉少奇、鄧小平を初め、朱徳、賀龍、陶
鑄、あるいは、北京市長の彭真など多くの人々を実権派
として批判し、軍の力をバックに紅衛兵を先兵として彼
らの権力を奪取する闘争、つまり奪権闘争を行った。そ
してそれは成功したかに見えた。しかし、少し長い目で
見れば必ずしもそうではなかった。実務派の「批判と抵
抗の非連続な総体」を崩すことはやはりできなかった。
それが明確な組織体であれば、徹底的に切り崩すことが
できたかもしれないが、「非連続な総体」であるがゆえに
それができなかったのである。

実務派の指導者たちが毛沢東思想を批判するようにな
った動機や時期はみなまちまちである。あるいは、大躍
進政策で、あるいは、軍近代化論争で、あるいは、中ソ
関係で……というようにそれぞれの動機で様々な時期に
いろいろな形で毛沢東路線を批判する立場になっていっ
た人たちの総体が実務派である。したがって彼ら個人個
人はある時期までは皆毛沢東路線の忠実なる実行者であ
る。劉少奇をとってみても、彼はかつて一九五八年、毛
沢東の大躍進政策を鼓吹する有名な演説をやっている
し、彭真にしても、陶鑄にしても、あるいは鄧小平にし
ても皆かつて毛沢東を讃えてきた。そういう人たちがそ
れぞれの動機でさまざまな時期に、次々に毛沢東思想か
ら離脱した。そういう非連続な総体であることがまず実
務派のある意味での強さである。

しかも実務派は「非連続」である上に単に中央のみな
らず各地方、各生産点にまで根をはっている。いい換え



葉劍英(ようけんえい)



彭眞(ほうしん)



李徳生(りとくせい)



許世友(きよせいゆう)



李先念(りせんねん)



羅瑞卿(らすいきょう)



陳丕顯(ちんはいけん)

れば、生産点の第一線に立っている人々は毎日のように階級闘争、階級闘争……と言っているわけにはいかない。その日の生産のノルマを果し、その日の収穫を考えなければいけない。その日その日の問題をいろいろな方法でともかく解決していかなければならない。そういう人たちは、階級闘争、政治闘争第一主義の毛沢東路線にどうしてもついて行けなくなる。したがって結果的に実務派にならざるを得ないということである。

こういう風に実務派の認識が広範な中国社会の生産第一線にいる人々の暗黙の合意となってきたところ、実務派の第二の強さがある。したがって、毛沢東・林彪の文化大革命、尊権闘争も実権派(「実務派」)を根こそぎにすることはとてもできなかったのである。

実務派形成の三段階

ここでその「非連続な総体」としての実務派の代表的人物を少し歴史的にふりかえってみよう。

私は実務派の先駆者が我々にはつきりわかる形で登場したのは、何とんでも大躍進政策以降であると思う。つまり大躍進政策という、いわば非常に急進的な人間の主観性に依拠した大衆動員方式の経済政策がもたらす無理や弊害に気づいた人たちが、実務派のいわば先駆者であったと思う。

このいわば第一期の実務派としては、まず彭徳懐という人物に注目しなければならない。そしてこの彭徳懐を支えた人物としては、たとえば農業の指導者であった鄧子恢、あるいは、軍の中で彭徳懐と共に毛沢東の「大躍進政策」に反対した黄克誠、あるいは董雲等を挙げることができる。こういう一連の人たちに支えられて、彭徳懐は一九五九年八月の廬山会議(第八期中央委員会第八回総会)において毛沢東に真っ正面から論争を挑んだわけ

である。大躍進、人民公社政策をはじめ軍近代化問題、対ソ関係(中国独自の核武装に反対)をめぐる毛沢東と衝突した。しかし、彭徳懐はその論争に敗れたため、一般に修正主義者、あるいは、親ソ派といわれるが、私は実務派の先駆者として見たい。

実務派の第二期は経済調整政策期である。

この第二期の中心人物は、いうまでもなく劉少奇、鄧小平である。劉少奇、鄧小平は彭徳懐の政策を表向きは批判しつつ、つまり表向きは毛沢東に同調しつつ、実質的には彭徳懐の政策を継承していったのではないかと思う。私が実務派を「非連続な批判と抵抗の総体だ」と定義した理由の一つである。ここに中国社会の毛沢東あるいは毛沢東思想に対する批判の在り方の一つのスタイルがあると云ってもいい。劉少奇や鄧小平は、毛沢東の大躍進政策を批判することによって、大躍進政策を後退させ、もっと堅実な経済政策をとろうとした彭徳懐の意図を実質的には取り入れ、しかしながら表向きは彭徳懐を批判しつつ、なし崩し的に毛沢東路線を修正し、毛沢東の権威を崩上げしようとした。そういう意味でいわゆる「実権派」として批判された劉少奇、鄧小平は中国における実務派形成の第二期を担ったということが出来る。しかし彼らも文化大革命によって毛沢東・林彪に敗れた。そして私はこの文化大革命以後、実務派形成の第三期を担ったのが周恩来でないかと考えている。周恩来は第一期に彭徳懐グループが、第二期に実権派つまり劉少奇鄧小平グループが批判されて失脚していったときに、毛沢東思想といういわば「錦の御旗」に対して表向き抵抗することは、いかに政治的にリスクが大きいかということを経験かつリアルに計算し、失脚を免れたすぐれた指導者だった。したがって周恩来はいわば「毛沢東体制下における非毛沢東化」をいかにしてはかっていくかと

いうことに心を砕いたと思う。そして、毛沢東を讃えながら、毛沢東思想を誇示しながら、実質的、路線的にはそれを修正していくという非常に困難な事業に取り組んだ。この周恩来の周囲には、長いあいだ彼と歩みを共にしてきた李先念副総理、あるいは現在残っている数少ない軍の長老の一人である葉劍英、こういう人たちがいたというふうに考えていいと思う。

「面従腹背」を見破った四人組

これら第三期実務派はすでに述べたように彭徳懐や劉少奇の轍を踏まないように、いわば最後まで保身につとめながら、しかしもつと広い意味での国家的な使命感に立って毛沢東思想なり、毛沢東路線の弊害を修正していくという非常にデリケートで困難な道を歩んできた。あの意味では毛沢東思想に対する非常に巧妙で忍耐強い「面従腹背」を続けてきたと言える。しかし私は、この面従腹背を江青グループ（四人組）は目ざとく見破っていたのではないかと思う。したがって毛沢東の晩年、周恩来批判と思われる「批林批孔運動」、あるいは鄧小平批判であったと言われる「水滸伝批判」が起ってきたわけである。

しかしその周恩来が昨年1月カンで他界した。そして周恩来を中心とした第三期実務派は葉劍英、李先念、ある意味では、実務派という呼び方はされていないが一貫して毛沢東路線の監視者であったと思われる朱徳というような存在によって一応ひきつがれたとも言える。

しかし間もなく朱徳が他界する。葉劍英や李先念は政治的な指導者として彭徳懐、劉少奇、周恩来のような強力なリーダーシップを発揮し得る人物とは必ずしも思えない。したがって私は、むしろ実務派の基盤は中堅幹部

によって受け継がれたと言えるのではないかと思う。そして奇しくも彼らの多くは湖北省の黄安県の出身である。陳錫連、許世友、李徳生それから李先念……すべて黄安県出身である。この黄安県グループが、周恩来亡きあとの実務派の一つのリーダーシップを形成し、軍、國務院、あるいは科学院の中堅指導者たち（たとえば國務院の余秋里、谷牧、「中堅」とはいいがたいが文革で失脚し、近年復活した羅瑞卿元総参謀長、最近復活した五〇年代の総参謀長粟裕ら）と共に、毛沢東、周恩来亡きあとの「周恩来路線」の継承を模索するのではないか、そしてその模索の過程で再び「鄧小平の影」が大きくクロースアップされてきたということではないかと思う。つまり、鄧小平は、抗日戦争期の八路军一二九師政治委員時代、内戦期の第二野戦軍政治委員時代を通じてこの黄安県グループと深いつながりを持っているからである。

こういうふうに見てみると、実務派の脈々たる流れが、やや逆説的な表現になるが、非連続ながらある意味で太い「連続」を形作っているということが言えるのではないか。したがってここで、私は再び「文化大革命」とは何であったのかという問が発せられなければならないと思う。それは毛沢東の大いなる虚妄であったのではないか。結局革命後の中国社会を何ら変革することができなかった。

昨今の中国の事態が何よりもそれを雄弁に物語っている。四人組失脚やクロースアップされる鄧小平の影はむろんのこと、最近の注目すべきニュースはまず、かつて北京市長、北京市党委員会第一書記彭真と共に注目された上海の党委員会第一書記陳丕顯の復活である。かつて文化大革命の最中に私は上海を訪れたが、黄浦江のほとりの旧バンドには紅衛兵の壁新聞、あるいは路上にまで貼りつけられたスローガンの中で陳丕顯は激しく批判さ

れていて、いわば上海の実権派ナンバーワンであった。その陳丕顯までが復活してきたということは文化大革命の虚妄性をいっそう露にしている。

第二に注目しなければならぬのは、今日中国で江青夫人があれほど悪しきまにのしられていることの意味である。少なくとも40年近く江青夫人が毛沢東の最愛の妻であり、そしてまた党中央の政治局委員までのし上がるのを許してきたのが毛沢東であるのは周知の事実である。だとすれば、これは毛沢東の権威を貶め、冒瀆することに他ならないのではないか。同時にこれは、にもかかわらず他方で毛沢東思想の継承を声高に主張しなければならぬ華国鋒体制のジレンマでもあり、同時にある意味での毛沢東の権威の凋落、非毛沢東化が潜在的にそこに始まっていることを意味するものでもあるのではないだろうか。

華国鋒のジレンマ

特に華国鋒最大のジレンマは、鄧小平問題の処理である。この華国鋒と鄧小平の関係については四人組の逮捕があまりに衝撃的であったがゆえに、非常に単純明快な事実が見落されている。華国鋒については、謎にまつまられた部分や不透明な部分も多いが、華国鋒が文革の過程で毛沢東に引き上げられ、四人組に支持されて台頭してきた人物であることはほぼ疑いない。これは、昨年から今年にかけての中国の政治過程を振り返ってみても歴然としてい

周知のように鄧小平は昨年の1月8日の周恩来の死去に際して、1月15日の葬儀で弔辞を読んだが、その弔辞は中国革命の諸段階における周恩来の功績については詳しく触れ、革命後、特に文化大革命については詳しく流した程度であり、しかも最後に「わが国を近代的な社

会主義の強国に築きあげるために奮闘すべきだ」という形で、周恩来の遺言ともいえる「四つの現代化」路線の継承を誓っている。これは、いわば実権派（実権派）の立場からの周恩来追悼に等しい。それにいらした四人組を中心とする毛沢東側近が、1月下旬から2月初めにかけて開かれた「重要会議」において、鄧小平の総理昇格を阻止した。そして2月7日の清華大学における壁新聞が口火を切る形で「走資派批判」が展開され、翌日國務院副総理ではあったが、あまり目立たない存在であった華国鋒が総理代行という形でクロースアップされ、私自身も含めて、周恩来の後継者、つまり首相は、鄧小平以外にはないだろうと考えていた世界中の中国研究者を驚かせたことは、まだ記憶に新しい。

つまり、まずこの段階でも、華国鋒はいわば鄧小平を批判する形で台頭したわけである。

さらに冒頭で述べた天安門事件が4月5日に起り、鄧小平はこの事件の首謀者として、つまり反革命分子として党内のあらゆる公職を剝奪された。そしてこの公職剝奪は毛沢東の指示だと言われた。四人組が失脚し、鄧小平復活が時間の問題となった今日、中国ではこの指示は毛沢東の甥であって、瀋陽部隊の政治委員の毛遠新がゆがめて伝達したものであるというような言わげが行われているが、これは非常に苦しい言いわけである。というのはこの天安門事件に対処すべく行われた4月7日の政治局会議の決議は、この鄧小平の職務を剝奪した決議とともに、同じく「毛沢東の提案に基づいて」華国鋒を党第一副首席兼國務院総理に選出するという決定を行っているからである。

つまり、党規約にもない党第一副首席という地位をここでややどろなわ式につくってまで、華国鋒をクロースアップした。しかし、もし毛沢東の鄧小平の公職剝奪に

関する指示が、毛遠新によってゆがめられたものであるならば、華国鋒の党第一副首席選出の指示もゆがめられたものだということになりかねないし、そうなれば華国鋒の正当性も疑われざるを得ない。しかしそれはさておいても明らかなのは、この第一副首席就任の際にも、華国鋒は、いわば鄧小平の公職剝奪という代償において、第一副首席という地位に就いたということである。

鄧小平の影

その後、華国鋒は天安門事件以降の中国民衆のすさまじい上海グループを中心とした毛沢東側近への批判と周恩来への敬愛の念を前にして、上海グループ（四人組）から離れていく。そして毛沢東が他界する。このような状況の中で華国鋒の四人組追放クレーター―北京政変があったのではないかと思われる。こういう非常に単純明快な事実、つまり華国鋒は首相代行就任の際にも、党第一副首席・首相就任の際にも、すべて四人組とともに鄧小平を批判する形で就任したという事実は、中国研究者やジャーナリストの間でも、十分認識されていると言いがたい。

こういう前提に立てば、華国鋒は北京政変を十分に合理化することも難しいし、党主席という現在の地位を十分に正当化することもまた難しいといわなければならぬ。したがって、鄧小平が内外の注目を浴びつつクロースアップされてくることは華国鋒の地位を脅かすことにもなりかねない。私はここに鄧小平復活がなかなかスムーズに進展しない理由の少なくとも主要な一つがあると思ふ。

華国鋒は鄧小平の影に脅えざるを得ない。したがって、華国鋒は鄧小平復活を一日延ばしにしたいと考えざるを得ないのではないか。

そこには今まで述べた正当性の問題以外に、華国鋒と鄧小平の能力の問題もある。内政、外交ともに華国鋒に鄧小平ほどの能力があるとは私には思えないから、結局彼は周恩来―鄧小平路線とでもいふべきものを踏襲せざるを得ない。つまり彼は、いわば自分の生立ちや体質はむしろある意味で四人組に近いところにありながら四人組を追放し、政策的には実務派路線を継承しなければならぬという大きなジレンマの中にいるということができよう。しかも、中国民衆は華国鋒を民衆の間から浮き上がった存在であり中国民衆の怨嗟の的であった四人組の打倒のいわば「下手人」としては評価していてもそれ以上ではないかもしれない。

華国鋒は最近盛んに個人崇拜をフレームアップしているかのようである。たとえば、自分の書を毛沢東の書と並べて発表したりしている。しかしこれは毛沢東の達筆に比べていかにもお粗末でしかなく、少なくとも文字の国、中国の指導者としての彼の資格を疑わせるに十分である。

私は逆にこのようなやや悲劇的な個人崇拜に華国鋒の鄧小平の影への脅えを見、鄧小平によって象徴される実務派―毛沢東批判の非連続的総体の根深い底力を見るのである。

本稿執筆後、4月30日、中国の譚震林全国人民代表大会常務委副委員長は、日本の全国都道府県議会議長会訪中団と会見した際、首相以下の政府人事を決定する第五期全国人民代表大会が今年後半に開かれること、鄧小平前副首相の再復活が今秋行われることを初めて明らかにした。しかし、本稿は基本的にはいささかも修正の必要がなく、また安易な部分的修正は本稿の意図をかえって不鮮明にすると考え、あえて一切加筆修正をしないことにした。――著者